令和２年度　南予教育事務所　社会教育課通信　NO.41（2020.12.10）

つながり

「南予教育を考える集い」報告～プログラミング教育の在り方のヒント～

11 月 12 日（木）愛媛県歴史文化博物館で、「南予教育を考える集い」が開催されました。

今年度は、内子町の武田林業・武田惇奨氏を講師に迎えて、「地方が教育の題材になる。木育×プログラミング教育を事例に」と題して講演を行いました。

武田氏は、「モックアッププログラミング教室」を開設し、内子町の学校・家庭・地域連携推進事業の一つ「うちこ未来塾」にも携わっておられます。講演では、従来から地域にある林業と新しいプログラミング教育を掛け合わせた取組を紹介していただきました。廃材でつくった車の模型にセンサーを取り付けた実物を提示してもらい、子どもが楽しみながら自然素材に触れたり、プログラミングに親しんだりする様子が伝わってきました。また、当たり前にあるものと教育を結びつけるアイデアの出し方、アイデアをもとに新しい企画にチャレンジする方法など、新たな視点も示していただきました。

身近で最新の教育が講演のテーマだったので、参加者の関心も高く、様々な感想が寄せられました。

プログラミング教育への期待が高まりました。子どもたちが地元の産業を学ぶことで、郷土愛が育まれるだけでなく、プログラミング教育との連携で子どもが地域の担い手の一人になる可能性が出てきました。

教育×地域資源…広がりは無限大だと思います。「はじめの一歩」を地域と一緒に考える良い機会となりました。

地域の資源をどう教育につなげていくか、この取組はとてもおもしろかった。教育の現場でも、こういう多様な人材を育てていけるような工夫・取組をしていかなければならないと感じた。

プログラミングでどこまでできるのかということを理解できていなかったので、講演を拝聴して、理解が深まりました。今までプログラミングに触れてこなかったので取っつきにくいものでしたが、プログラミングと地域の人にとって身近なものを掛け合わせることで、興味がない人にもプログラミングに興味を持たせることができることが本日の大きな学びでした。

今回は、感染症対策のため、参加人数を制限して開催しましたが、学校教育関係者、社会教育関係者が一堂に会して、次世代を担う子どもたちの教育について一緒に考える機会となりました。今年度から小学校でプログラミング学習がすでに始まっていますが、学校外の地元の山々を舞台とした「木育×プログラミング教育」の取組をヒントに、何のために学ぶのか、どのように学ぶのか、学びが生活にどうつながっていくのか改めて考えたいと思います。